光の〝空気感〟形に

袋井出身の大庭大介さん

平面作品で新機軸

虹彩を放つ2㍍四方の空間。光が移ろい、桜の花が一面に浮かび上がる。袋井市出身の大庭大介さん(28)＝茨城県取手市＝は3月、平面美術の若手作家を奨励する「VOCA展2010」（東京・上野の森美術館）に出展した。「作品と人との関係性が鑑賞の場を作る。メッセージを前面に押し出さず、見る人の感性に委ねたい」と話す。

常葉学園菊川高在学時から油絵に取り組み、京都造形芸大に進んだ。2007年の東京芸大院修了制作時から、偏光パールの絵の具を使った創作を始めた。題材には花や木立、山の尾根などの自然が目立つ。

色合いは淡く、見る角度や光の加減で〝表情〟を変える。「光には、はかない空気感がある。柔らかで固定観念を植え付けない」と大庭さん。光と影の存在を浮き立たせる発想は、日本古来の感覚とも合致する。

原色を使ってくっきりと描く油絵の技法に抵抗感もあった。「自分にとって、色は強迫的なイメージ。人に固定概念を植え付ける」

東京芸大院在学中には、立体や写真にも挑戦した。多くの表現方法から選んだのは平面だった。「長い歴史を経て、平面の技法はほぼ飽和状態にあるが、いまだ一表現として残っている。その中で、自分に何ができるか」

過去に学び、新しい何かを生み出そうと模索する。「自分にとって絵は、工芸のようなもの。社会批判やメッセージを打ち出すのではなく、きれいだ、美しいという普遍的な感情に目を向けたい」

「平面にしかできないことを探求したい」と話す大庭さん＝茨城県取手市のアトリエ